

あの時、 あなたの笑顔が あったから

ふるさと浪江を遠く離れて、辛く不安な避難生活を過ごした日々。
それでも、あなたの笑顔があったから、希望を捨てずに前を向くことができた。
新たな絆が生まれ、もう一度はじめてみようと思えた。
震災から10年。支えてくれた方々に、
あのとき言えなかった感謝の言葉を伝えたい。





ふるさと浪江の物語を 紙芝居というかたちで 語り継いでいきたい。

元 桑折駅前応急仮設住宅 自治会長
小澤 是寛 さん

震災後、娘夫婦の誘いを受けて相馬市に移り住みました
が、いつまでも世話になるわけにもいかず、2011（平成
23）年6月に桑折町の応急仮設住宅に入居しました。準備
された部屋は4畳半2間と台所で不満も多かったのです
が、ここで広島県のボランティア「まち物語制作委員会」の代

表・福本英伸さんとの出会いがありました。当時は、震災
直後の「物資の支援」から避難者の「心の支援」へと移行し
ていた時期で、紙芝居を使って浪江の昔話を作ろうというプ
ロジェクトが始動しました。2012（平成24）年7月、桑折
町駅前応急仮設住宅で最初の上演を行ったのを機に、地元
の民話、伝統芸能、3.11の避難の物語などをテーマにした
紙芝居が次々と誕生し、2014（平成26）年6月には「浪江
まち物語つたえ隊」が結成されました。中にはアニメ化され
た作品もあり、ガレキの下に人を確認しながらも原発事故
の影響で避難せざるを得なかった消防団員の悔しさや、風
評被害への憤りを描いた作品「無念」はフランスでも上映さ
れ、大きな反響を呼びました。現在、紙芝居は55作品を数え、
県内外の避難先を中心に上演会を行っています。

現在、つたえ隊のメンバーは10人。語り部の高齢化が進
んではいますが、ふるさと浪江を思うすべての人たち、避
難時に物資・心の支援をいただいた全国の皆様に「紙芝居」
というかたちで恩返しをできればと考えています。



紙芝居を絵本化した「奇
跡の避難」「大堀相馬焼き
物語」は、浪江町の中小学
校、関係者に寄贈

あの時、
あなたの笑顔が
あったから



新しい安らぎの住まいで 様々な出会いに支えられ 顔の見える地域づくりに尽力。

県営北沢又団地自治会長
元 笹谷東部応急仮設住宅 自治会長 熊田 伸一 さん

住まいは請戸地区にあり、震災時は自宅から2kmの勤務先
にいました。揺れが収まった後に家に戻ると、母、家内、娘、
孫の家族たちは、急いで避難の準備をしていました。その後
は県内外を転々と避難。孫が小学校に上がる年だったので、
山形市の避難所近くの小学校に入学しましたが1週間後に

は猪苗代に住まいを移すことになり、友達を作ることでもできず
転校し、かわいそうでした。6月には福島市笹谷地区にできた
応急仮設住宅に入居し、2013（平成25）年から自治会長に就
任しました。2017（平成29）年に現在の県営北沢又団地に移っ
てからも、自治会長を続けています。

応急仮設住宅の時は、長屋暮らしのようなご近所との近
さがありましたが、現在の団地ではプライバシーが確保さ
れている反面、ご近所のつながりが薄れているところもあり
ます。高齢者の一人暮らしも多く入居者も減少傾向で、
地域のコミュニティづくりがとても大切になっています。
幸い地域の自治会の皆さんも協力的で、一昨年から夏祭り
やカラオケ交流会を開催しています。当初カラオケは昼の
部だけでしたが好評で、夜の部もできたほどです。その他
にも福島大学やラブフォーニッポンの皆さんなど、応急仮
設住宅で暮らしていた頃から今でも交流を持ってくださり、
辛い避難生活の中でも貴重な出会いでした。前を向いて生
きていこうと思えます。今後も住民の方が心身ともに健康
に暮らせるように、自治会長の責任を全うできればと考えて
います。



団地住民と地元住民の
親睦を図るため開かれた
料理教室



避難生活で再認識した 人とつながることの喜び その想いを胸に土を耕す。

元 二本松建設技術学院跡応急仮設住宅 自治会長
鎌田 優 さん

震災当日は発電所の送迎バスを運転していました。地面が波打つ程の揺れで、サイドブレーキは利かずハンドルから手が離せませんでした。乗っていた社員が通路に投げ出されるくらいでしたから。その後、娘が住んでいる神奈川県小田原市に避難したのですが、浪江の情報が全く入って

あの時、
あなたの笑顔が
あったから



避難先で生まれた温かな絆 震災から10年が経っても そのつながりが心を癒やしてくれる。

元 旧平石小学校応急仮設住宅自治会
渡邊 悦子 さん

震災から5ヵ月後、5回目の避難の時に二本松市の旧平石小学校応急仮設住宅に入居しました。浪江からの避難住民と言っても、入居者の避難元の地区はばらばらでした。この中で住民同士が親睦を図るように、東日本復興プロジェクトからご支援をいただき集会所のお茶碗や座布団などの備

こないのが辛かったです。そこで2011(平成23)年の10月に、二本松の応急仮設住宅へ入居することにしました。

私たちが入居した応急仮設住宅は30世帯と小規模でしたので、住民同士がふれあえる機会をできるだけ設けました。荒地を拓いた畑での野菜づくりもその一つで、作業の合間の会話が何より楽しみでした。自治会長を6年務めることになりましたが、家族親戚のように接していた住民をはじめ、たくさんの人とのつながりに助けられた月日でした。

浪江町の花、コスモスの植栽や、地元の味だった紅葉汁(鮭汁)の再現は、来てくださった支援者の方を、もてなしたい気持ちから始めたものでした。お酒もよく飲み交わしました。二本松市大平地区の方にもお世話になりました。祭りに呼んでもらったときは、うれしかったですね。

3年前から白河市表郷地区の古民家に住まいを移し、耕作放棄地を借り受けて野菜づくりをしています。新しいことにも挑戦しています。白河の史跡ガイドができるように、好きな歴史を勉強中です。観光客や白河の方たちとも豊かな地域の歴史遺産を通して、新しいつながりができれば楽しいですね。体が続く限り少なくともこの先10年は、畑仕事も新しい挑戦も、元気に頑張りたいと思っています。

今も続いている応急仮設住宅の元住民の皆さんや支援者の方たちなどとのつながりは、私たち夫婦にとってかけがえのない支えになっています。収穫した野菜をお送りすると、季節の便りのように全国からお返事が来ます。そんな感謝の気持ちの交流が、私の原動力になっています。

品をそろえ、お茶会や手芸など住民で頻繁に集まれる機会を作るようにしました。私は、この頃高齢者が多い中で人員不足だった町の社会福祉協議会のお手伝いをする仕事をしていました。自治会運営は自治会長の天野淑子さんがよく動いてくださり、住民はもとより支援者とのよい絆を築いてくださいました。避難生活の中で全国から多くの支援をいただきました。震災翌年からご自身が育てたお米を、毎年送ってくださった熊本県合志市職員の高野和子さんとの間に生まれた絆のように、いろいろな人の輪が今も心を癒やしてくれます。

私は現在いわき市遠野に住んでいますが、越してきた当初は避難住民という負い目もあって、住民の方たちと関わるのを避けていました。年々地域のことを知るようになり、最近のご近所とお付き合いも増えています。浪江に一時帰宅すると、私が知っている町の景色がどんどんなくなり寂しくなっていました。今は新しい町ができていく様を見て、若い世代がどんな浪江をつくってくれるか楽しみになりました。町の将来を見てみたいと思うようになったのも、これまで多くの皆さんのご支援があったからだ、感謝の気持ちでいっぱいです。

旧平石小学校応急仮設住宅
の婦人会で製作した手芸作品





利用者の皆さん全員と 無事に再会できたこと。 この「奇跡」に感謝したい。

NPO法人 コーヒータイム
橋本 由利子 さん

震災に遭ったのは、大堀地区に障がい者の就労訓練の場「コーヒータイム」を立ち上げて5年目の時でした。利用者15人は家族や知人を頼って避難し、私は利用者の一人を双葉町へ送った後、翌12日には相馬市、仙台市、相馬市と避難しました。お互い連絡が取れない不安な状況でしたが、

二本松、福島、川俣などに利用者がいるという情報が入ってきましたので、バスやタクシーを乗り継いで一人ひとり安否を確認して回りました。3月13日には川俣の小学校の体育館で利用者の一人と合流できたのですが、ここに避難しているはずの利用者のお母さんの姿が見当たりません。試しにと携帯電話を鳴らしたところ、向こうから着信音が聞こえてきて抱き合って喜びました。幸いなことに誰一人欠けることなく、利用者全員と再会することができました。みんな生きていてくれて本当によかった——。この「奇跡」には感謝の気持ちしかありません。

震災は本当に辛い出来事でしたが、全国のたくさんの支援者とつながることができました。この絆が私たちの原動力です。現在コーヒータイムは二本松に3カ所の事業拠点があり、喫茶店の接客、手作りコースター、糸巻きボールペン製作といった多彩な活動を展開しています。私の今の夢は、ふるさと浪江で「コーヒータイム」を再開すること。たくさんの元気をもっと伝えて、皆さんへの恩返しをしたいと考えています。



糸巻きボールペン製作の様子（二本松市若宮事業所）。2カ月で2万本以上の発注がある人気商品

あの時、
あなたの笑顔が
あったから



なみえ焼そばをきっかけに つながった太い絆に 感謝の言葉しかありません。

浪江焼麺太国
八島 貞之 さん

2007（平成19）年に浪江町商工会の青年部長に就任して、翌年に浪江焼麺太国の初代太王に就任しました。当時は地域おこしというよりは、不況を共に乗り越えるための情報交換と仲間づくりが目的でした。若手メンバーから個性的なアイデアがいくつも出され、なみえ焼そばでB-1グラン

プリ入賞を目指そうと精力的に活動していた矢先の震災でした。私たち家族は塙町に避難したのですが、塙町商工会の青年部の皆さんから、テレビ、洗濯機、布団まで引っ越しの手配をしていただき、本当に助かりました。その後、馬場町長が塙町に訪ねて来てくれて「こんなときだけど、道の駅ふくしま東和のさくらまつりでなみえ焼そばをふるまってくれないか」との要請を受け、後日、青年部の仲間を集めて二本松市へ向かいました。私たちが活動することで、浪江町の避難状況を一人でも多くの人に伝えられると思ったからです。

震災の年、兵庫県姫路市で開催されたB-1グランプリには、車で片道18時間かけて参加しました。浪江焼麺太国は4位入賞でしたが、壇上でスピーチする機会をいただき、町おこしをする全国の仲間に「必ずふるさとを取り戻すまで頑張ります」と誓いました。このことがきっかけで、全国各地のイベントや祭りに呼んでいただけるようになり、避難されている浪江の皆さんともふれあうことができました。

震災前は鉄工所を経営していたのですが、2015（平成27）年には、ビルメンテナンス業をはじめ地元の仕事に関わり地域に貢献するため、八島総合サービスに社名を変更し再スタートしました。大人の悪ふざけのようなノリで始めた浪江焼麺太国ですが、出会ったすべての皆さんには感謝の言葉しかありません。2017（平成29）年3月31日の浪江町の一部避難指示解除を一区切りとして世代交代をしましたが、これからも町民の方と一緒に浪江町のために頑張っていきたいと思います。